

東アジアの平和の連帯を目指して

李^イ壽^{スン}成

※本稿は、2017年10月8日に東京・中野区のコングレスクエア中野で行われた韓国の李壽成元首相（国務総理）による講演の内容に加筆していただき、その部分^{（国務総理）}を翻訳・追加して編集したものです。「」内は邦訳に際しての補注です。

「戦争を簡単に考えてはならない」

皆様、こんばんは。日曜日にもかかわらず、このように夜、集まっていたいただき、申しわけない気持ちで一杯であります。皆さんがこの場に来られたのは、いろ

んな先生方の誘いとか、さまざまな機縁からであったと思いますが、人の意思ではなく、天の意思で集まったと考えていただければ、ありがたいと思います。

「二人ひとりが奇跡の存在」

人間がある親のもとに生まれてくる確率は、生物学的には二億五千万分の一という説があります。約三億分の一です。そのお父さん、お母さんも三億分の一の確率で生まれてきました。またお祖父さん、お祖母さんも三億分の一の確率で生まれてきました。三億かけ

る三億かける三億です。これを十回かけると、どれほどの数字になるか考えてみてください。ですから、人間が生命をもってこの地に生まれてくるのは「奇跡」であります。無限大分の一の確率で生まれてきたということですから。現人類の歴史というのは二百万年ともいわれております。この地球が誕生してからは四十六億年といわれており、現在は七十億の人口があります。

このような本当に広い空間、そして長い時間のなかで私たちは生まれ、そして、今日、この場に同時に集まってきたのであります。ですから、これは天の御心といひましょいか、天の意思でなければ、いったいどういう不思議でありましょいか。

皆さんは、あまりにも尊い存在であります。親とか周りの方たちから限りなく愛されて生きてきた方たちと思ひます。法華経には一人ひとりが仏性をもった仏であるといひますね。またキリスト教では、誰もが神様の子どもであり、イエスのきよきよであるといひられております。つまり、本当に皆さんたちは尊い存在なのです。背が高いとか低いとかは関係なく、お金持

ちかどうかも関係なく、たくさん知識があるかどうかに関係なく、人間すべてが貴重な存在なのです。ですから、自分だけが特別な存在ということではなくて、誰に対しても謙虚であらねばなりません。また国籍も関係ありません。日本で生まれようが、韓国で生まれようが、人が選択する問題ではありません。神様の御心によるものであります。

先ほど、私に関して身に余る紹介をしていただきました。しかし、実は私はいした人間ではありません。私は単に、東アジアと世界の平和を念願しているだけの、いたらない人間です。「人間は決して、他の人々に対して傲慢になる権利はない」と信じているだけの人間なのです。たしかに、ソウル大学の総長をさせていただきます、首相という仕事もさせていただきました。かといって、皆さんよりも取り立てて優れているわけはありません。ただ、私の生き方として、自分の利益のために他人に害を与えたことはありません。そして、自分なりに、孤独に苦しんでいる人たちや困っている人たちを救おうという気持ちで生きてきました。その

No Image

李壽成博士は自らの苦難の体験と平和への信念を語りつつ、東アジアの未来のために連帯を築いてほしいと、青年に熱い期待を寄せた

ような意味で、皆さんに、人生の先輩として一回ぐら
いは私の話を聞いてもらってもいいのかなと思います。
講演のタイトルは、「東アジアの平和の連帯を目指して」
であります。どうすれば東アジアの平和が建設できる
のか。それを皆様とともに考えてみるためのささやかな
試みであります。

過去の「すさまじい悲劇」を忘れるな

私が生まれたのは、我が国が日本の植民地支配を受けていた時代です。一言でいって、韓民族の歴史と痛みをともに経験した世代であります。また、戦争を全身で体験し、戦争がどれほど残酷か、平和がどれほど大切かを私はよく知っております。

一九五〇年に起きた「六・二五韓国戦争」（朝鮮戦争）も、この身で直接体験しました。私の父は当時、弁護士だったのですが、北韓（朝鮮民主主義人民共和国）の軍に拉致され、連れて行かれてしまいました。私の母は日本に留学し、日本の大学（日本女子大学）を卒業した女性ですが、父が生きているのか死んでいるのかもわ

からない状態で、その後五十年以上にわたり、本当に悲しく寂しい思いで、一生を終えました。これは我が家の問題です。しかし、これはまた皆さんの祖先の問題でもあります。皆さんの祖父祖母の世代にあたるのでしょうか、もつと上の世代かもしれないですが、その方たちも、たとえば日本の兵士として、インドネシアなどの南方とか、さまざまな地に行かされ、まことに苦しい思いをしながら死を遂げたのであります。皆さんはわからないかもしれませんが、祖父の時代の方々は数知れぬ苦痛の中で生き、また死んでいったのです。数百、数千の小説でも彼ら一人の苦痛を書き尽くすことはできないでしょう。皆さんには希望に満ちた明るい未来がありますけれども、過去には実に苦しい、さまざまな歴史があったということも忘れてはならないと思います。

日本に併合される前、我が国はまだ王制でありました（李氏朝鮮）。そのときの王后（閔妃、死後に「皇后」の諡号）を、日本の官憲が大陸浪人らとともに宮廷に乱入して殺害しました。暴行もしたといわれています。今

日は女子学生もたくさん来られているので申し上げにくいのですが、そういう非道な事件がありました（一九九五年十月八日の乙未事変）。その後、日本は五十年も韓国を支配したわけです。私はそういう時代に生まれ、成長しました。では、日本は「悪い国」なのかというと、そうではないのです。戦争になれば、どの国民でも互いに殺しあつたりするわけです。韓国人もまったく同じです。日本の植民地支配下、多くの韓国人も軍人として召集され出征して行って、たくさんの人を殺しました。ベトナム戦争のときは米軍と一緒に戦争に行つて、ベトナム人をたくさん殺してしまつたわけですから、これは戦争が問題なのであつて、民族性が問題なのではありません。

「戦争を知らない人間」が戦争を始める

ともかく、戦争のことを簡単に考えてはいけません。私は首相として在職していた当時（一九九五年十二月―一九九七年三月）、軍の首脳部に会い、万が一、南北間に戦争が起きたならば、その結果はどうなると思うか聞いて

たことがあります。彼らは「われわれのほうが軍事的にはるかに上なので、全面戦争になっても勝てます」と言い、いつ戦争になっても問題はないと自信のほどを述べていました。その一方で、「数百万の民間人の犠牲はもちろん避けられないでしょう」という話もしていました。私はその話を聞いて、まことに悲しく思いました。「戦争を経験したことのない人々、戦争のことだけを考えている一部の職業軍人、戦争は必要悪であると考える一部の知識人。彼らは、戦争のことをあまりにも簡単に考えているのではないか」と痛感したのです。

戦争は本当に悲惨です。戦争を直接経験していない人には絶対にわかりません。家族が銃弾に倒れ、砲弾で殺され、離れ離れになり、家は破壊されます。何があろうと起こしてはならないのが戦争なのです。単に、勝つとか負けるとかいった問題ではないのです。何百万人が死ぬか生きるかの問題なのです。戦争を起こす動機を誘発するために、誰かが弱者に対して挑発を行う。それに対して、弱者が反発する。たとえば北韓が

反発し、その反発に対して、また挑発を行う。こういうことを繰り返しているうちに、核戦争でも起きてしまったら、日本と韓国は完全に人質に取られ、そして両者とも壊滅はまぬかれないだろうと思われまます。それにもかかわらず、軍事専門家という人たちが、また知識人や政治家たちが、新たな兵器を保有せねばならない、造らねばならない、配備せねばならないなどと主張し、また北韓を牽制しなければいけないと言っています。これは戦争を軽く見ているのです。本当に悲しいことであります。

したがって、指導的立場にいる人たちは「戦争だけは起こしてはならない」という確固たる信念に基づいて、外交と安全保障問題を扱わねばなりません。また、国民も平和を望み、戦争に絶対反対する強い声を上げ続けなければなりません。惨憺たる戦争の結果を予想してすませるのではなく、平和を愛し、その声を大きく外に広げていかねばなりません。そして政治家は、そういう民衆の声をしっかりと受けとめなければなりません。

いまの平和は仮そめのもの

今年は大島、長崎に原爆が落とされて七十二年になります。日本の国民、そして多くの在日同胞が被爆し、また太平洋戦争の悲劇を体験しました。

十九世紀以降、韓半島（朝鮮半島）、日本、中国を含む東アジア地域は、西欧の列強による侵略と、たび重なる戦争を経験してきました。西洋は産業革命によって、たくさんの強力な兵器を造り、アジアやアフリカなどを侵略していきました。日本にはその当時、先覚者がいたので、深刻な被害を受けることなく、西洋化に成功できました。ところが、韓国と中国は甚大な被害を受けました。当時の政治指導者が賢明でなかったからだといっても過言ではありません。

そして、東アジアは長い間、戦争の渦に巻き込まれ続けてきました。一八四〇年にはアヘン戦争、一八九四年には日清戦争、一九〇四年には日露戦争、一九三〇年代には満洲事変ならびに日中戦争、そして一九四五年までの第二次世界大戦、一九四九年まで続いた中

国の国共内戦、一九五三年まで続いた韓国戦争、さらに一九七五年まで続いたベトナム戦争などです。西洋と東洋の文明間の衝突、西欧の帝国主義国による植民地争奪、軍国主義による紛争、資本主義対共産主義の対立など、さまざまなことが絡み合っただけでなく、東アジアでは国家間の大きな戦争は起きていません。しかし、私たちはまだ楽観することはできません。私たちがこの地域で享受している平和は、まだ仮そめのものにすぎないのです。なぜなら、いつでも軍事紛争と国際的全面対決に至る危険をもつ過去の要因がそのまま残っているからです。

このような、平和に対する潜在的脅威とは何でしょうか。そのうちのひとつが領土紛争です。第二次世界大戦が終結した後、各国が独立したため、東アジアの領土問題が深刻化し始めました。過去の領土問題が主に陸地の領土拡張のための戦争であったとするならば、二十世紀後半以降の領土問題は主に海を中心に展開されています。そして近年、海上の安全保障と海洋資源

開発の重要性が浮きぼりになり、島嶼地域の領有権をめぐる葛藤が激しくなってきました。(対立する国家間の) 文化的類似性、歴史的経験の共有、地理的近接性などが絡み合っており、さらに対立が激化するという悪循環が続いています。

東アジア地域の海洋領土問題には、韓国と日本の間の独島トクト(日本における呼称は竹島)問題、日中間のいわゆる尖閣諸島問題、日口間の北方領土問題、また東南アジア方面には南沙諸島(スプラトリー諸島)と西沙諸島(バラセル諸島)問題などがあります。このような島をめぐる対立は、二十世紀後半以降、資源確保の必要性とナシヨナリズム的感情の広がりによって、さらに深刻になっています。

さらに、この地域の軍事的緊張の高まりと軍備競争も深刻な脅威です。

北東アジアは軍備競争に巻き込まれ、また北韓、台湾、南中国海(南シナ海)、東中国海(東シナ海)をめぐる、先端兵器の開発と軍事演習が相次いでいます。北韓の核開発とミサイル技術の進歩、そして中国の相次ぐ軍

備増強と日本の防衛政策の変化は、東アジア各国の軍備競争を加速させています。概観しますと、昨年(二〇一六年)の中国の国防費予算は一四五〇億ドルで、アメリカに次いで世界第二位を占め、日本は四七三億ドル、韓国は三三八億ドルに達しています。二〇一七年の中国の国防予算は前年比で七パーセント程度増加し、初めて一兆元を超えました。中国の国防予算の増加率は、この二十数年間、一貫して経済成長率を上回っています。

韓半島周辺海域における米中両国の海軍力競争は、ますます激しくなることが危惧されます。アメリカの原子力空母が中国近海に接近すれば、中国は現在開発中の高性能艦艇の配備を増やし、それに対してアメリカではさらに東アジアの海軍力を増強すべきだという声が高まり、ピンポンゲームが続いています。また、北韓の核問題は北東アジアの平和にとって最大の脅威となっています。二〇〇五年二月、核兵器の保有を宣言した北韓は、二〇〇六年十月の一回目の核実験以来、本年(二〇一七年)九月までに六回にわたり核実験を行

いました。防衛のための開発という名分で行っている
同国の核実験とミサイル発射実験は、これに対する韓
米日の対抗戦略と相まって、東アジアの平和を深刻に
憂慮させるものになっています。

アジア・パラドックス

その一方で、現在、東アジアでは、就職、留学、国
際結婚などで歴史上例をみないほど活発な人的・物的
交流が行われていることについて考えてみたいと思っ
ます。

過去の冷戦時代から抜け出し、韓国と日本、中国を
はじめ東アジア各国の政治的・経済的交流は日ましに
増加しています。その結果、世界経済において東アジ
ア経済が占める割合も増加しており、各国間の分業と
協力も拡大し続けています。近年は、政治、経済だけ
でなく、交通と通信の発達により、東アジア各国の民
間交流も急速に増大しています。韓国、日本、中国は
毎年数百万人が相手国を訪問して観光しており、留学
などの人的交流も急増しています。これとともに、三

カ国のさまざまな音楽、映画、ドラマなどが交流し、
韓流、日流、華流などのような文化現象が現れていま
す。この十数年で東アジア各国の大衆文化交流は爆発
的に増えています。たとえば、韓国の大衆文化は中国
や日本で大きな人気を得ており、中国人をはじめ外国
人が韓国で歌手や俳優として活動し、韓国の芸能人が
中国や日本などの映画やドラマに出演することが、ご
く普通のことになっています。

ところが、このような交流拡大の一方で、葛藤も深
まっている様相があります。二〇〇〇年代に入り、日
本の政治状況の変化にもなつて続いていた歴史論争
に、領土問題、教科書問題、靖国神社参拜問題などが
加わつて、歴史と領土をめぐる韓日中三国間の論争が
激化しているのです。

このような現象の背景には、日本の政界の変化、中
国の台頭、韓日中三国間の国力の縮小など複雑な
要因があります。特に、領土問題と歴史問題は韓日中
の関係を悪化させる要因となつており、これらの葛藤
を解決することに失敗すれば、東アジアの緊張はさら

に高まり、対立が深刻化するでしょう。

このように、経済・文化分野の相互依存が深まるのとは対照的に、政治・安全保障分野の葛藤が増加するという「アジア・パラドックス」現象が起きているのです。では、この「アジア・パラドックス」を克服し、韓日中三国がともに東アジアの平和を構築していく方途は何でしょうか。これについて考えてみたいと思います。

「これが帝国軍人のすることですか！」

政治・経済問題が複雑で難しくなればなるほど、私たちは根本的な問題に目を向けなければなりません。根本的な問題——それは人間の問題です。

私には忘れえぬ思い出があります。一九四四年夏のことでした。私が小学校一年生の時です。現在のソウルの私が住んでいた地域にポソン（普成）中学校という学校がありました。当時、ソウルは京城とよばれていたのですが、その学校に京城駐屯の憲兵隊がいました。私は、学校の鉄条網のそばにある桜の木に登ろうとし

ていました。たぐさんのさくらんぼが実っていて、それを取ろうと思って、塀の上に登ったのです。そうしているうちに私は転げ落ちてしまい、中学校の中に入ってしまいました。そこを見回り中の憲兵に見つかって、将校たちがいる部屋まで私は引っ張られて行きました。その場には、少佐や大佐たちがいました。一人の憲兵から名前を聞かれました。私が韓国名を告げると、「貴様は創始改名していないのか」と、非常に厳しく叱られました。

当時、韓国の名前から日本の名前に変えなければ、小学校に入ることもできない。そして配給も受けられない。砂糖とか塩も手に入らない。そういった状況でした。今、韓国内で、後の世代の人たちが当時のことをわからずに、創始改名した韓国人は親日派であるなどと批判します。悪いことをしたんだと。これは、当時の状況をまったく知らないで言っていることです。創始改名しなければ、学校にも行けないし、餓死しなければならなかったのです。私は父の信念で改名していませんでした。

名前のことや、軍の施設に入ったということで、彼らは「お前は軍隊の敷地に侵入したスパイだ」と私を決めつけました。「ひざまずけ！」と言われ、私は床に正座させられました。そして、一人が日本刀を抜いて、私の首に切りつけるような動作をしました。刃のない側（峰）で私の首を、こうやって叩いたのです。他の憲兵たちは笑ったり、こわい顔を私に向けていました。私はその時、生まれて初めて、日本語で「たすけて」と叫びました。

その時でした。立ち上がって、私を床から抱き起こしてくれた人がいました。その場にいた一人の憲兵中尉でした。「これが帝国軍人のすることですか……大日本帝国の軍人が、幼い子どもに対して、こんなまねをしてよいのですか！ これは野蛮な行為ではありませんか！」。そう言って、自分よりも上官の人たちに異議を唱えたのです。

そして「家はどこなの。僕が送ってあげるよ」と言っ
て、私の手を取って、家まで来てくれました。「これは決して驚くようなことじゃないんだよ。人間には善

い人も悪い人もいるんだからね」と。「君のお父さんは何をしている人？」と聞くので、「うちの父は弁護士をしています」と答えました。「お父さんはどこの大学を出た？」。「東京大学を出ました」。すると、その中尉さんは「そうだったのか。僕も東大出身なんだ」と言い、家に着くと、本当にかしこまった態度で、私の父に深々と頭を下げて、「先輩、大変に申し訳ないことをいたしました」と謝りました。一生涯、私はこのことを忘れることができませぬ。本当になんと善良で、堂々と

いて、素晴らしい方なんだろう、と思ったのです。父はその後、「日本人だからといって、皆が悪いわけではない。韓国人だからといって、皆が善いわけではない。どこの国にも、善い人もいれば、悪い人もいます。それぞれが自分の業のままに生きているのだ。だから、垣根を超えて、善良な人たちが力を合わせて素晴らしい世の中をつくらなければいけない。そして、どんな人にも、愛をもって接していくべきなのだ」と語ってくれました。私にとつて、民族を超えて「皆、同じ人間なのだ」という観点を深く学ぶ機会となったのです。

ワールドカップの「韓日共催」を提案

私にはずっとそういう思いがありましたので、「二〇〇二年の」サッカーワールドカップを韓国と日本のどちらの国が開催するかが大きな問題となっていたとき、「共同開催」を強く主張したのです。一九九六年のことです。六月初めには、日本か韓国か、どちらか一方の国に決まるという段階でした。

私は言いました。韓国と日本は、もともと、きょうだいの国である。さまざまな悪い出来事も歴史的にはありました。豊臣秀吉の我が国への侵略であるとか、大日本帝国による植民地支配とか、いろいろあったけれども、もともとはきょうだいの国なのだから、スポーツのことで争い、犬猿の仲になつてはならない。そういう思いで、当時、私は首相であつたので、記者会見をいたしました。今までの歴史上のさまざまな悪縁をこの機会に切つて、むしろスポーツを通じて友誼を回復し、平和な関係の両国を目指していきたい。そして、FIFA（国際サッカー連盟）が同意すれば、両国の共

同開催をぜひ実現したいという提案を記者会見でいたしました。⁽¹⁾

こういう主張に対して、日本からは「韓国の首相はものごとをよくわかつていないのではないか。ワールドカップで二つの国が共催するなどということは、これまでなかったし、これからもありえない」と批判されました。また韓国国内からは「韓国が単独で開催すべきであつて、共催を主張するのは首相の独断である」と批判されました。しかし私は「韓国の国民と日本の国民が、共同開催に向けて、お互いが親しく努力すべきであると考えます」と、はっきり申し上げました。その後、FIFAの理事会で満場一致で韓日両国の共催が決まったわけです（一九九六年六月一日に公式発表）。

新聞報道によると、二〇〇二年のワールドカップ共催以降、韓国人の日本人に対する好感度は六〇%以上にも上がりました。そして、日本人の韓国人に対する好感度もやはり六〇%以上になりました。両国の間で急速に友好ムードが高まったのです。このように、胸が痛む苦しい思いがあつても、良いことがあると、

一気に結氷を溶かすことがあるのです。

だからこそ、人間対人間として、率直に対話し、友情を分かち合うことが大切なのです。二十一世紀は、そのように「人間」に焦点を合わせなければならぬ世紀です。「誰もが幸福を望み、平和を望む」同じ人間同士「なのだ」という点を皆が深く理解すれば、不要な誤解や偏見を取り払うことができます。

以前、私がある青年に聞いた話です。彼はサッカー教室を開いていましたが、韓日友好に役立ちたいという思いから、小学生たちを連れて学校が休みの期間に、日本を訪問したということです。連れて行った子どもたちを日本の子どもたちの家にホームステイさせて、韓日の子どもたちとともにサッカー教室でプレイしたのです。最後の別れの日に、子どもたちは皆、空港で別れを惜しんで泣いていたということです。

この子どもたちは大きくなっても、国籍に関係なく、言葉が通じなくても分かち合えた友情の思い出を心にもって、互いの国を「友だちの国だ」と考えることでしょうか。

国粹主義を超越する「人間性革命」

平和指導者の模範・池田先生

私が心より尊敬申し上げる池田大作先生（SGI（創価学会インタナショナル）会長）は、「戦争は絶対悪である」とおっしゃいました。どのような状況であれ、戦争は防がなければならない、世界は平和を守らなければならないと主張して、きわめて多くの世界の指導者と対話してこられました。池田先生は東洋哲学研究所の創立者でもあるので、皆様もよくご存じだと思います。

私が池田先生に直接お目にかかったのは、一九九九年十二月、東京においてでした。先生は我が国に対して心からの敬意を表してください、**「文化の師匠の国」****「兄の国」**とおっしゃいました。その姿に深い品格が感じられました。先生は本当に謙虚であられ、それと同時に、獅子が世の中をすべて見渡しているような威厳が備わっていました。また、人間愛に満ちたお姿で私に接してくださいました。私はあまりにもいたらない

No Image

李壽成博士（中央）を歓迎する池田SGI会長。1999年12月2日、東京・八王子市の牧口記念会館にて。©Seikyo Shimbun

人間ですが、なれるならば、こういう人間になりたいと常々思っていた人間像が、まさに池田先生のお姿にありました。先ほど、韓国で生まれたか日本で生まれたか、それは重要な問題ではないというお話をいたしました。それでも、皆さんも私も国籍による限界性というものをそれぞれ抱えています。しかし、池田先生はそういうものをはるかに超越している方です。

先生は「貴国は日本にとって文化大恩の国です」とおっしゃいました。皆さんも歴史の勉強をすればすぐにわかると思いますが、本当に韓半島からさまざまな文化が日本に伝わっております。上野公園には、日本に漢字を伝えた王仁博士〔百済から論語と千字文を伝えたとされる〕の記念碑があります。また法隆寺の建設にあたって、半島から技術者がたくさん渡来しております。陶磁器の技術は、「薩摩焼の」沈壽官家の始祖など多くの陶工が十六世紀に半島から〔豊臣秀吉の出兵により捕虜とされて〕日本に来て、大きく発展させました。その技術が現代まで発達して、世界に誇る日本の文化となっております。

一九七四年だったと思いますが、池田先生は中国の周恩来総理と会見されています。総理はガンで闘病中のため病院での会見でしたが、この出会いは両国の友好を望む二人の巨人の邂逅であり、深い感動を呼びま

す。周恩来という方は、私が見る限り、本当に偉大な人だと思えます。長い間、毛沢東の参謀役でもありました。会見当時は、文化大革命のさなかでしたが、革命の名のもとに本当に数多くの人が迫害され殺害されました。その渦中であって、周総理は自分が権力を握るというのではなくて、自分の力の及ぶ限り、多くの人を助けました。中国を現代化させた鄧小平氏も周総理が助けた一人ですね。その周総理は池田先生に対して、創価学会は民衆を基盤とする団体であると評価され、先生を讃嘆されました。池田先生の目は常に民衆に向けられており、民衆が平和にそして正義の中で暮らせるように熱望しておられる——そう見抜いておられたのだと思います。その通りであり、池田先生のまなざしは常に民衆に注がれてきました。政治的立場や経済的利害を超えて、民衆が幸福な世界を築かねばな

らないというのが池田先生と創価学会の精神であり、それは創価学会の初代会長・牧口先生が軍部に反対し、獄死された信念の姿からも確認することができます。

ご承知のように、現在、日本と韓国・中国の関係はあまりよくありません。そういう中であって、池田先生は中国から百数十もの名誉教授称号を贈られています。韓国からも八十余りの勲章、市民証、道民証、名誉学位などの榮譽が贈られています。世界の中でこのような方はお一人しかいません。これは無理矢理やろうと思っても絶対にはできません。先生は善意、真心、努力を知っているからこそ、これほどまでに顕彰されているのです。

「敵兵も誰かの息子です」

国と国との葛藤を解消するためには、政治、経済、外交、安全保障の次元などでのアプローチも大切ですが、池田先生が言われている通り、もつと根本的な解決策は、民衆の間で交流を広げていくことだと私は信じています。先に述べたように、韓日中三国がさまざま

まな文化芸術交流を拡大しているので非常に勇気づけられますが、そのような交流を通して、互いの歴史的な経験の違いを乗り越え、友情を育んでいくことが大切です。

なканずく重要なのは青年の交流です。韓日中三国の青年たちが互いに出会い交流する経験は、彼らが社会の指導層になった時、深い連帯意識をもって東アジアの平和を話し合える土台となるでしょう。

私がソウル大学総長として在職中、日本の東京大学、中国の北京大学と連携して合同学術会議を開催したり、東京大学、北京大学の学生たちを多数、ソウル大学に迎え、学生交流を推進したのも、そのような願いからでした。今は留学生の数もその時に比べれば大きく増加しましたが、その留学生たちがどのような交流をしていくのか深い関心をもって育成することが、各国の大学の使命であると思います。

また、大学関係者と教育界は、自国の利益を至上命題として他国の不幸を無視するような偏狭な「国粹主義者」ではなく、世界平和を視野に自国の発展を追求

する「世界市民」を育成しなければなりません。

宇宙船から地球を見下ろしたとき、国境は見えませんが、人の国籍にしても、自ら望んでその国に生まれてきた人はいないのであり、国籍に関係なく、誰もが「平和に暮らしたい」と望んでいるのです。「敵国」の兵士も、まさに誰かの息子なのです。皆、人間です。「人間対人間」という立場で交流を結び、友情を広げることが、真の民衆交流、民間交流です。

二十一世紀は「第四次産業革命」の時代だといわれており、時代の流れはそのような方向に進むでしょう。しかし、われわれ人類は何より、宗教や民族、国家で人間を評価し分類する、そういう意識を超えなければなりません。二十一世紀の人類は、宗教や民族、国家の違いを尊重しながらも、そのような帰属意識以前に「同じ人間である」という事実を深く自覚しなければなりません。その上で、人間として、自分自身を尊重し、相手を尊敬する心をもたねばなりません。私は、これこそがまさに「意識革命」であり「人間性革命」であると申し上げたいのです。

それが必要であるという点については、韓国も日本も中国も同じだろうと思います。アメリカも、ロシアも、イギリスも、フランスも例外ではありません。経済発展で国が豊かになったとしても、国民が物質万能主義に陥り、経済的な富だけを追求する浅はかな人間性となるならば、その国の精神は健全とはいえません。私は、「人間の豊かな国こそが、真の文化国家である」と考えます。

金九先生「世界でもっとも美しい国を」

私には忘れられない人生の師匠がおります。和合と中庸をもとに団結を訴えられた大韓民国臨時政府の（第二代）大統領、白岩・朴殷植先生であり、そして韓民族独立運動の偉大な指導者であられた金九先生です。私には金九先生との思い出があります。小学五年生の時、父が私の手をつないで、先生のもとに連れて行ってくれたのです。その時、金九先生は私の頭をなで、先生の著書（自伝『百凡逸志』）に「李壽成学人惠存」としたためて贈ってくださいました。小学生である私に「惠

存」と敬意を込めて書いてくださったことを、今でも忘れることができません。

金九先生は次のように述べています。「わたしは、われわれの国家が、世界でもっとも美しい国となることを願っている。もっとも富強な国となることを願うものではない」と。そして「ただ、かぎりなく多く持ちたいものは、高い文化の力である。文化の力は、われわれ自身を幸福にするばかりでなく、さらに進んでは、他国へも幸福を与えるだろうから」と。²⁾

金九先生は、我が国の独立のために熾烈に戦われましたが、日本を決して憎みませんでした。独立を達成した暁には、我が国と日本が信頼し合って、世界平和のために力を合わせなければならないというお心でした。このように平和と文化の美しい心が連なる、そのような社会をつくることこそ韓日中三国が向かうべき方向であり、真の人間性回復運動であると私は思います。

本日は、東洋哲学研究所の講演会ですので、東アジアの平和のための政策的提言というよりも、一層深い

ところにある民衆の心の姿勢、そして民衆の連帯をどのように結んでいくのかに主眼を置いて話したいと思えました。長い目で見たときには、そのような意識の変化こそが、より重要であると考えからです。

政治と民間交流の分離「ツートラック政策」

その上で、具体的な提案にも少々触れてみたいと思います。

東アジアの平和問題は韓日中三国と北韓、アメリカ、ロシアなどの利害が非常に複雑に絡み合っています。

このような情勢ですから、国家指導者たちが危機的状況を賢明に管理することが重要です。それと同時に、政策立案者のいかなる方向性にも左右されず、東アジアの民衆の交流を広げていくことが大切なのです。すなわち、政治的な問題に影響されることなく、経済交流、文化交流などの民間交流を拡大しなければなりません。これが「ツートラック (Two Tracks・二つの通路) 政策」です。

韓日関係に即して申し上げますと、両国間には歴史

問題、領土問題などの葛藤がありますが、これらの問題に足を取られることなく、未来に向けて、両国関係を発展させなければなりません。これは一九九八年に韓国の金大中大統領と日本の小渕恵三首相が合意した「金大中・小渕共同宣言」〔日韓共同宣言21世紀に向けた新たな日韓パートナーシップ〕の基本方向でもあります。これまで、この宣言が十分に成果を出してきたとはいえません。しかし、両国の指導者は、今再びこの方向に向かつていくべきです。

二〇〇〇年代初め、この宣言の一環として、大衆文化の交流拡大が本格的に行われ、日本に韓流ブームが大きく起こり、韓国でも日本の文化が多く紹介されました。そして、そのように開放された分だけ、互いの文化をより多く理解することになり、親しみが感じられる契機となりました。これからは、民衆交流、民間交流の拡大というレベルを超えて、さらに深い次元の交流を追求すべきです。

そして、より根本的な両国関係の発展のためには、両国が真摯な心で、過去の歴史を見つめなおす必要が

あります。北東アジアの歴史の激浪の中で、ある国が舞台の前面に出てきたとき、それが本意ではなかったとしても、近隣の国々と民衆に苦痛と悲嘆を与えたという厳然たる事実を否定することはできません。

「歴史の前進のためには、不幸な歴史には蓋をするほうが望ましい」という主張もあります。しかし、歴史に対する明確な認識と評価がなされないまま、厳然と起り存在していた過去の事実が忘却されるのを望むとしたら、それは歴史に対する正しい姿勢ではなく、問題解決のための正道でもありません。

その意味で、池田先生が言われた「真実をきちんと残し、積み重ねていかないと、正しい歴史観がゆがめられ、また未来に不幸を重ねてしまう。正しい歴史を残すことが、人類の平和と幸福の道を残すことになるのです。歴史は、ゆがめたり、歪曲したりしてはいけません。歴史をつくってしまつては小説になってしまつてしまいます。悪いことを隠し、格好のよいことだけを残しては、歴史書ではなく虚飾書になってしまつてしまふ³⁾」との言葉は、本当に深い洞察力をもった勇氣ある発言であり、韓日友

好のための「黄金の言葉」であると思います。

師弟の連帯——東洋的価値の復興

最後に、東洋的価値の復興という話をいたします。

東アジア各国は、一世紀前に迫り来た西洋文明の衝撃をいかに消化・克服し、新たな文明の基盤を築いていくのかという共通の課題を抱えています。東アジアの文明は数千年の間、世界的に最も高い水準を誇ってきましたが、この百年間は、過去との連続よりも、むしろ過去との断絶にさらされ、その副作用も少なくなつたと思います。かつて、インドの先進的な仏教思想を数百年の努力を通じて昇華させ、東アジアの普遍思想として展開したように、西洋文明もまた、東アジア全体の共有の努力で質的に昇華させなければならぬと考えます。一九七五年に亡くなつた歴史家アーノルド・トインビーは、「西洋の技術文明というものがどんなに発達しても、二十一世紀に必要なのは東洋の精神文化である」という意味の主張をしております。そして、私たちには東洋的価値として共通にもつて

いる崇高な価値観と高い文化があります。たとえば、忠孝と仁義礼智信の精神です。親に孝行し、国に忠誠を尽くし、友の間では信義を守る。そして人と人の間では礼節を尽くす。これは韓国、日本、中国の共通の文化であり、東洋文明の真髄にあるものです。

世界的哲学者がこういう話をしました。ある国が立派であるかどうかを決める基準とは何か。それは国土の大きさではない。またお金をたくさん持っているのか、つまり資本がたくさん蓄積されているのか、そういう問題でもない。軍事力が強いかどうかという問題でもない。一国が立派であるかどうかを決める基準とは、その国に住む人たちの道徳的な力である、ということです。先ほど述べたように、金九先生もそう考えておられましたし、中国においても、孔子や孟子は、文化こそが国にとって最も大切なのだと書いておられます。聞く人によっては、これは夢のような、つかみどころのない話かもしれません。どこの国でも軍隊や兵器を持っているし、経済競争にしのぎを削っている。何が平和だ、何が文化だと批判するかもしれません。し

かし、どのような状況であれ、人間が人間としての品性を失い、隣人を愛することができず、強者が弱者をいじめる世の中になってしまえば、それは人間の世界ではなく動物の世界です。そうではなく、互いに助け合う共同体精神、修己治人しゅうじちじんとくする高い道徳性、知行合一ちこうごういつの生き方の涵養こそが、私たちの共通の課題なのです。そのうち、本日、強調したいものの一つが「師弟」という連帯についてです。

大学の教師となつて以来、私が心にもつてきた生き方の基準の一つが「学生に恥じない師匠になろう」ということでした。その原則があつたからこそ、弱い自分に鞭打ち、不義に妥協しようとする誘惑があるたびに断固としてはねのけて生きることができました。韓国社会の激しい変転の中で、批判され、圧迫され、また投獄されても、私の精神は生き続けてきたと自負しています。歳月が過ぎて、どれだけ自分に満足できるのか振り返ってみると、ただ恥ずかしいばかりです。実は、率直に申し上げますと、私はときに絶望感に見舞われることがあります。今の時代の流れを見ると、

清く正しく人のことを思うような世ではなく、利己主義の世の中であり、まことに残酷な風潮が蔓延していると思えてなりません。若い人たちを信じ、希望を見出したいと心から願っているのですが、高校生であれ、中学生であれ、若い人の行動に残酷性が感じられて、未来に対して暗い気持ちになってしまうことがあります。

ところが、今回、創価大学を訪れ、何千人もの学生が皆、肩を組んで大学の学生歌を歌っており、その光景を目の当たりにして本当に感動しました。創立者である池田先生に対する尊敬の心が自然なたちで感じられました。こういう心情は、誰かに言われて出てくるものではありません。そういう麗しい心で一致団結した素晴らしい姿を見て、私は大きな希望を感じる事ができました。

こうした「師弟」の絆から伝えられるのは、高貴な価値観であり、道徳を優先する生き方を貫く精神です。このような「精神性の継承」こそが、真実の文化の土台となるのです。その絆は、「美しい心」で生きる人材

群を育成し、彼らが「美しい国」をつくっていくでしょう。これが創価大学だけにとどまることなく、日本のすべての大学、韓国のすべての大学に広がり、韓日三国の青年たちが「美しい国をつくる競争」を繰り広げていってほしいと私は切願いたします。

「すべての人を幸せにするために生きる」

この場にいる方々は、全員が平和を望んでいる人だと思います。私たち皆が、「私たちは平和について語る資格がある」と、そして「その言葉は真理である」と言うことができます。

三八〇〇年ほど前（紀元前一七五〇年頃）にバビロニア人が作った「ハンムラビ法典」の石碑があります。一九〇一年から翌年にかけて、フランスの調査隊が発掘し、現在、ルーブル美術館にあります。近年まで、世界最古の成文法典とみなされ、フランスの学者（ジャン・ヴァンサン・シエイル）が解読しました。そこに出てくるのが太陽神です。太陽神シャマシユが、ハンムラビ大王に法典を授けたというかたちになっています。

その前文に、この法典の意図が書かれています。すなわち、この世ではすべての人が幸福に暮らす権利があるのに、実際にはそういう暮らしができていない。ごく少数の人間が幸せを享受し、ほとんどの人たちは惨憺たる暮らしをしている。だから、王よ、あなたは不当な強者を打ち砕き、善良な人々を救わねばならない。このような内容になっています。⁽⁴⁾

私たち皆が、この王のような決意をもって生きなければなりません。特別な階層の人たちだけではなく、すべての人を幸せにするために生きるのです。そのためには、何としても平和でなければなりません。平和を望む民衆が、平和を守るために断固たる決意で協力するならば、いかなる不義の力にも打ち勝てます。そう私は信じております。皆さんは、あるいは「自分には力がない」と思うかもしれませんが、そうではありません。皆さんの中には、限らない力があります。ここにいるお一人お一人が、手を携えて、日本、韓国、中国の若者たちが一つになって、本当に力を発揮すれば、世界平和は必ず成し遂げられると確信して

おります。

皆さんは私の大切な後輩であり、私の子どもであり、息子であり、娘であるという、そういう思いから、今の私の心情をありのままに話させていただきました。皆さんが幸福であることを願い、皆さんを愛しているすべての人たちが幸福であることを心より願って、本日の話とさせていただきます。

質疑応答

【質問者A】 私たち一人ひとりが実は大きい力をもっていて、皆がその力を合わせれば平和を実現できると言うてくださったのですが、現実には、それがなかなか実感できません。多くの人が利己的な考えももっているし、自分が自分で信じられないことがあります。そういうなかで、具体的にはどうしていけばよいのか、何かヒントがあれば教えていただきたく思います。

【講師】 素晴らしい質問、ありがとうございます。私もまったく同じであります。私も自分自身の力というのはあまり信じてできません。しかし、先ほど冒

頭に言いましたよね。生命というのは本当に一人一人が尊厳なるものであり、神秘なものであると。「全世界をあげるから、君の命をくれ」と言われても、絶対にあげられるものではありません。皆さんの両親に「世界中のすべての富をあげるから、君の息子、娘を殺せ」と誰が言っても、親というものは絶対に自分の子どもを殺せるものではありません。

それでも、人間が自分自身の力というものを信じるのは本当に難しいことです。私もそれを現実に体験しました。絶体絶命の逃げられないような状況に追い込まれて、本当に殺されるのではないかという状況になったこともあります。しかし、そんなときに、自分も知らないような力が、私を助けてくれました。

皆さんも、これから人生を生きて行くなかで、良いことも悪いことも、さまざまに経験していくことになります。しかし、決して「絶望」はしてはなりません。「自分は今もうこれ以上、どうしようもない」と自分で思ったとしても、自分を生かしてくれ、守ってくれる力が必ず働いてくれると思います。厳しい、極限の状況

になったときも、自分の知らないところで、自分の周囲の人たちとか、何かが、天が皆さんを守ってくれると思います。私は今、「その力を信じなさい」と言うことしかできません。ですから、ぜひ、私の話を信じたほうがよいですよ（笑い）。

【質問者B】 私は教員養成大学で教育学を学んでおります。平和の創出のためには、どういう教育が必要なのか、そのあるべき姿や、教育に期待すること、また私たちが学生時代にどういったことができるのか、教えていただければと思います。

【講師】 人間は、生まれてからずっと教育を受けて生きてきています。父母からも教育を受け、天地からも教育を受け、動物からも教育を受けます。そして、人間の価値というものを学びます。教育の最終的な目標とは、すべての人間、すべての自然に対して恩恵、利益をもたらすことのできる、そういう人間になることです。これを韓国では「弘益人間」を指すと呼びます。自然科学も人文科学も、本来、すべての学問は、

人間のため、隣人のために生きるということを目指しているはず。他人を軽蔑したり、他人に害を与えてでも出世したいというような人間をつくるのは、決して「教育」とはいえません。

【質問者C】講演タイトルにある「東アジアの平和の連帯」のためには、日本とお隣の韓国、中国が、そして北朝鮮も含めた四カ国が協力することが大事だと思います。私たち日本国民がそのためにできること、なすべきことは何なのか。教えていただきたいと思えます。

【講師】これまで、日本は東洋の中で先駆的な役割をずっと果たしてきました。そして現在は、各国の国力の差がだんだん小さくなっています。しかし、北韓だけがそうなっておりません。あの韓国戦争の後（一九五三年以来）、「休戦」という緊張状態がずっと現在まで続いております。あらゆる過去の問題を乗り越え、ひたすら平和のために日本とアメリカと中国、韓国が平和協定を締結し、そして日本や韓国、アメリカ、中国が北韓にたくさんの投資をして、北韓に立派な鉄道や

道路が造られ、中国やシベリアにまでもそれがつながり、東ヨーロッパへ、そしてヨーロッパ大陸全体へと拡大していったときには、北韓も今よりもはるかに豊かになり、人間らしい暮らし、平和、現代文明、このようなものを皆で共有することができましょう。そのとき、平和が必ずやつてくると思います。

南北韓の戦争触発の危険、世界滅亡の危険、少なくともアジア壊滅の危険を避け、平和を成し遂げ、投資し、互いに協力していけるよう日本が大きな役割を果たしていただきたいと私は願っています。

（通訳・翻訳 李映子（イヨンジャ））

注

（1）李博士の主張は日本の大学の研究者の論文でも、こう取り上げられている。「サッカーも重要だが、そのために韓日関係のように伝統ある善隣関係が損なわれるのは望ましくない」（李寿成韓国首相。1996年5月3日、記者会見で）。黄盛彬「2002W杯はどのように語られたか——試論「日韓比較」の再考」19

96年共催決定から2002年開幕まで——」、立命館大学人文科学研究所紀要No.81（二〇〇二年十二月）、五〇頁

(2) 東洋文庫『白凡逸志—金九自叙伝』梶村秀樹訳注、平凡社、一九七三年、三三一頁

(3) 『池田大作全集 第64巻 対話』聖教新聞社、二〇〇五年、一八二頁。『青春対話 1（普及版）——21世紀の主役に語る——』同、二〇〇六年、一三四—一五頁

(4) ハンムラビ王はこの法典の作成意図を、その前書きで、こう述べている。神々が「ハンムラビ……私を、国土に正義を顕わすために、悪しき者邪なる者を滅ぼすために、強き者が弱き者を虐げることがないために、太陽のごとく人々の上に輝きいで国土を照らすために、人々の肌（の色つや）を良くするために、召し出された」。また、後書きでは「強者が弱者を損うことがないために、身寄りのない女兒や寡婦に正義を回復するために……虐げられた者に正義を回復するために、私は私の貴重な言葉を私の碑に書き記し……」と述べている。古代オリエント資料集成1『原典訳 ハンムラビ「法典」』中田二郎訳、一九九九年、リトン、二頁・七二頁

李壽成（イソン）／現在、ソウル大学名誉教授。1961年、ソウル大学法学部卒。67年からソウル大学で教鞭を執り、78年に法学部教授に就任。88年、大学初の直接選挙で法学部長に選出。95年、ソウル大学総長に。同年12月、首相（国務総理）に抜擢された。97年まで首相を務めた後、金大中大統領の諮問機関「民主平和統一諮問会議」の首席副議長、韓国民俗博物館初代館長、韓国刑事政策学会名誉会長その他を歴任。現在も、白凡金九先生記念事業協会理事、東アジアセンター名誉理事など多数の要職を務める。著書に『信頼と希望』（1997年）、「政治は愛である」（2002年）などがある。97年10月、青条勤政勲章を受章。

池田SGI会長は99年の李元首相との会見後、氏についての随筆を執筆し、『地球市民の讃歌——世界の指導者と語るII』（潮出版社、2002年刊）に収録している。